

第9回 市民参加懇談会コアメンバー会議
- 市民参加による政策検討会議 -
議事録

1. 日 時：平成 15 年 4 月 30 日（水） 14：00～16：20
2. 場 所：中央合同庁舎第 4 号館 6 階 共用 643 会議室
3. 出席者：木元座長（原子力委員）、森嶋座長代理（原子力委員）、碧海委員、井上委員、小川委員、小沢委員、吉川委員、中村委員、松田委員、吉岡委員（内 閣 府）大熊政策統括官、榊原参事官
4. 議 題：（1）「市民参加懇談会 in 青森」の開催結果について
（2）これまでの活動のとりまとめについて
（3）次回の市民参加懇談会の開催について
（4）その他
5. 配布資料
資料市懇第 9-1 号 「市民参加懇談会 in 青森」の概要
「市民参加懇談会 in 青森」アンケート結果
「市民参加懇談会 in 青森」議事録
資料市懇第 9-2 号 これまでの活動のとりまとめの扱いについて
資料市懇第 9-3 号 市民参加懇談会におけるこれまでの活動のとりまとめについて（案）
資料市懇第 9-4 号 次回の市民参加懇談会の開催について
資料市懇第 9-5 号 第 8 回市民参加懇談会コアメンバー会議議事録

6. 審議事項

- （1）「市民参加懇談会 in 青森」の開催結果について
事務局より、資料市懇第 9-1 号について説明。また、「市民参加懇談会 in 青森」に参加し、本日欠席した加藤委員からのメッセージを以下のとおり紹介した。

（加藤委員メッセージ）

「「市民参加懇談会 in 青森」は全体としてはいいムードであったと思う。行政の側が、こわごわという感じで情報を十分出さなければ、住民の信頼も得られない。思い切った情報公開を飽きずに行うことが、基本だという感想を持った。」

（木元座長）

- ・ 加藤委員は、市民参加懇談会の後で、「自分としてはこういう形で展開しているとは思わなかった」「意外性があった」という印象を持たれた。「こういう試みは、試行錯誤があるかもしれないけれども、その中で続けていくべきだし、自分もできるだけ参加したい」とも言っていた。それから、今ご紹介があった「行政の側が、こわごわという感じで情報を出す」ということの意味は、恐る恐る出すのは、これを出したら誤解されるのではないかと、過大にあおり立てるようなことになるのではないかと懸念を持っているからではないかということだ。良い悪いという結論は受けた側が評価するのであって、情報がきちんとあるならば、正確なものとして堂々と出す姿勢がまずあってほしい、その後で、住

民が信頼するとかしないとかいうことが出てくるのではないかと、ということも話し合った。

- ・ 皆さんのお手元に、さっきご紹介があった「市民参加懇談会 in 青森」第1部議事録と第2部議事録があると思う。あわせて50ページ程度という大変膨大なものだが、ぜひ後でお読みいただき、ご意見などあれば、いただきたいと思う。
- ・ 当日ご参加いただいたコアメンバーの方のほとんどが、本日いらしているので、ご意見をまず伺いたい。東京での開催に続いて、青森でも第1部で司会進行を務めてくださった中村委員からお願いしたい。

(中村委員)

- ・ 市民参加懇談会も、1つの方針のようなものがだんだん表に出てくるようになってきたという印象である。内容的に考えると、例えば第1部・第2部という構成についても随分議論したが、この構成自体も会の方向性を生むのにかなり効果的に機能したのではないかと思う。
- ・ 第1部のパネリストの人選というのがかなり重要な要素であり、第2部への問題提起あるいは発言を促すための第1部という位置づけにおいて、今回のお三方は大変すばらしいパネリストで、期待どおりの議論をしていただいたと思う。その内容というのは、アンケートにも反映されていると思うが、非常に印象的な発言がそれぞれにあった。これから市民参加懇談会を進めていくに当たっては、やはり第1部・第2部という構成ならば、第1部のパネリストの人選というのが相当大きな比重を占めるということが再確認できたと思うので、この人選には大いに皆さんの意見、知恵を出し合いながら、的確な人材をお招きするというのが大事だと思う。今回は良かったと思う。
- ・ 私自身も、何も最初にシナリオを考えず、テーマだけ持って皆さんの発言から展開していく形で進行したが、そういう進め方についても非常にレスポンスが良く、話の広がりも良かったし深みもあったし、一方的に話をするだけでなく、パネリストの間でも意見交換があったり議論になる部分もあったりと、パネルディスカッションとしての形も非常に上手にできたのではないかと思う。ひとえにこれはパネリストのおかげだと思う。第1部については、自分でそんな印象を持ちながらやった。

(木元座長)

- ・ うまく個性がかみ合ったというか、それぞれの立場、考えがかみ合っていたと思う。

(中村委員)

- ・ そう思う。立場を明確にして、その中から意見がはっきり出てきたので、そこが良かったと思う。

(木元座長)

- ・ 蟹瀬氏は最初から、「自分は原子力に全面的に賛成ではない」ということを明確に言われた上で論議を展開していったし、芦野氏が青森の方だったことで、地元の方の声が素直に反映されているなどと思った。

(中村委員)

- ・ アンケートや会場での市民の方の発言を聞いていても、芦野氏がパネリストにいたことによって、立場は反対の立場をとる方でも、ある程度推進の立場をとる方でも中間的な方でも、地元の仲間の1人があそこでああいう発言をしたということにつ

いては、非常に評価が高かったように思う。地元のパネリストというか、地域に根差して活動している方をパネリストにお招きするというのも、これも芦野氏は素晴らしかったというだけで、一般論ではなかなか言えないが、そういう方の中からパネリストをと、心がけるのも大事だと思った。

(木元座長)

- ・ 第2部は、前回、東京で開催したときは、井上委員と碧海委員が司会だったので、碧海委員に残っていただき、他にどなたかということで吉岡委員をお願いした。まず吉岡委員、第2部はいかがだったか。

(吉岡委員)

- ・ 第2部の司会を担当したが、風邪でちょっと声が出ていなくて聞きにくいところがあったものと反省している。
- ・ 市民参加懇談会のあと、蟹瀬氏と話したとき、「雰囲気は悪くはなかったけれども、これで何か提言ができるのか」とかなり疑問調の問いかけをしてきた。「私の意見では、無理ですね。人ごとではないわけですがけれども提言にまでは結びつきにくいですね」と答えた。これがまさに第2部の私の一番言いたい感想である。
- ・ 都会あるいは原発立地点で開催する、市民が直接参加する会というのは、やはり原子力政策に注文をつける会であって欲しいと思う。具体的な注文を出してもらい、その注文というのは基本政策に関わるものもあれば、必ずしも基本政策を変えなくても答えられるものもある。2種類あると思うが、そういう注文を出してもらって、それについてさらに何人かの人々が補足的に意見を言うことによって、より質を向上させ、それを私たちにぶつけていって、それを受けた私たちが原子力委員会にぶつけていくという形での注文を媒介する会であると私は理解しており、その点から見れば課題が残ったというのが私の反省である。
- ・ 何人もの方から積極的に発言していただいたが、その多くは日頃の活動や思いを開陳するというのが1つのタイプで、もう1つは事業者あるいは経済産業省に対して主にその2つだったと思うが、ここがわからないから質問するというタイプに分けられると思う。その2つのタイプそれぞれが自由に自分が質問したいこと、自分が考え、感じていることを言って、それが全体の議論の中であまり深められずに終わってしまう、今回もそういう会であったと思う。今までの会もそうであったと思う。すなわち、具体的な注文に結晶するまでには結びつかないという課題を抱えていると思う。
- ・ その課題解決に近づけるにはどうすればいいのかということ、やはりテーマを絞ることが重要だと思う。例えば、再処理だけ、あるいは再処理と中間貯蔵施設の2つに絞る等して、その上で注文をつけてくださいとお願いしてフロアから発言してもらおう。そうすれば、おのずと話す幅が限られ、議論の深まりも期待できると思う。そこまで至らずに、いろいろな人がいろいろなことを言い合って、その中には傾聴すべき意見も少なからずあったが、提言まで持っていけるような具体性においてはやや足りなかったと思う。次回以降は、注文会であるという趣旨を明確にした上で、テーマを絞って幾つか出し、注文のある人に挙手を願うという形で進めていった方が、具体的な提言につながりやすいと考えた。
- ・ 公明正大に振る舞ったつもりだが、司会がしゃべり過ぎだというアンケートもあっ

た。もう一つ気になったのは、司会が「下手くそ」であるというのがあり、具体的にもう少し中身を読んでみると、要するに今言ったような議論を深めるという形ではなくて、聞き置く会というような感じに終わってしまったということ。「下手くそ」と書いているようであった。言い換えると、テーマに沿って事前に発言者から出してもらったものを見ながら、こちらが流れをつくっていくべきだが、それをやらなかったことを「下手くそ」と解釈している。その意味では、私はあえて下手くそにやったわけだが、本音としては上手にやりたいと思っている。

(木元座長)

- ・ 一つ一つのシンポジウムで提言をまとめるというのは、至難のわざだと思ふ。原子力委員会への報告という形を後ほど相談させていただくが、シンポジウムなり市民参加懇談会を5つか6つ開催し、その中で出た意見を提言の形でまとめるなら、どうあったらいいかということはこのコアメンバー会議で討議しないと、提言という形にはならない。だから、各シンポジウムで提言を作るというのは、時期尚早というよりも無理だと思ふので、これは回を繰り返し重ねていき、その上で、出されたご意見をコアメンバー会議がしっかりまとめていく方向がいいのではないかと考えている。

(吉岡委員)

- ・ それは同感であるが、資料9 - 1にある要約よりももうちょっと深みのある提案というのがフロアから色々出てきて、それを並べることぐらいはできたのではないかとというのが私の意見である。

(木元座長)

- ・ 一緒に司会進行して下さった、碧海委員にも感想をお願いしたい。

(碧海委員)

- ・ 会が終わったときに真っ先に感じたのは、今回の催しで「知りたい情報は届いていますか」というところには割合と私もこだわったが、結局、副題の「核燃料サイクルを考える」という切り口が、特に後半の第2部のところで、ちょっと弱かったという気がした。もう少しそれを絡めなければいけなかったというのが、反省である。
- ・ この催しはまだまだ試行錯誤の段階だと思っている。前回の東京での開催と概ね同じスタイルで、前回ちょっとどうかなと思ったところを多少工夫し、それが良かった点、悪かった点、両方あると思うが、そういう試みもして、まだまだ試行錯誤だなという気がしている。
- ・ 今回良かったと思った点の1つは、参加者の中の関係者が、土曜日だったからだと思うが、割合と関係者っぽくなく、カジュアルな服装でふだんの格好で参加していたため、全体として前回よりも目立たず、一般市民という雰囲気もできていた点である。

(木元座長)

- ・ シンポジウムとはこういうものだ、まず専門家の基調講演があって、パネリストが意見を交代で述べてという固定観念を持っていた人からみれば、ちょっと意表をつかれるような第1部であったり第2部であったりするなら、それはもう成功の第一歩を踏み出していると思う。
- ・ 碧海委員の言う、観客がカジュアルであるということの意味として、今回、日本原

燃の労働組合の方が発言されたことを挙げたい。本当にこの会でも初めてであり、ほかでもあまりないことだが、社員としての立場以上に、核燃料サイクルを担う1人なのだという責任ある立場から、発言するという形ができてくるのも良いと思う。今までは、関係者は会場から発言できないような雰囲気があったが、自由に発言するという形をこれからも踏襲していきたいと思った。

- ・ 今回参加した松田委員からご意見を伺いたい。

(松田委員)

- ・ いろいろなシンポジウムを私自身が主催したり、参加しているが、今回初めて原子力関係のシンポジウムに出て、おもしろかった。すごく楽しかった。終わってからも、さわやかさが残ったと思う。
- ・ 今後は、完璧を求めずに数多くやることで、広がりが出てくると思う。自由な意見を伺うということで、主催者側もびくびくしていた面もあったわけだから、両方がお互いにフェアプレイだったというのがよかったのではないかと。きちんと反対の方たちも意見を言うし、私たちも意見を言うし、結論は出ないけれども、そういう場を持って楽しかったという感じがしている。

(木元座長)

- ・ 反対を述べてくださった方は結構いらっしゃるわけだが、どうしてそういう考えを持ったのか、それはどういうことに根拠しているのかとか、そういうことも若干話せた。それが重要である。

(松田委員)

- ・ 今の段階では、まとめ過ぎないのが一番大事だと思う。

(木元座長)

- ・ そう思う。吉岡委員が言われたように、何か深める議論というのが不満足な部分はあるにしても、その姿勢を貫くということが大事であると思う。

(松田委員)

- ・ そう思う。深める議論は、もっと小人数でやらないと無理だと思う。この委員会としての目的は広く聞かせていただくということで、パネリストの方たちも非常によかった。

(木元座長)

- ・ 司会はよかったか。

(松田委員)

- ・ よかった。やはり一流の人を持ってこないとだめだと思う。

(木元座長)

- ・ 何に一流の人を持ってくるのか。司会にか、パネリストにか。

(松田委員)

- ・ 第1部は、パネリストも司会も、一流の人が良いと思う。

(木元座長)

- ・ 一流というのは、なれているという意味もあるのか。

(松田委員)

- ・ そう思う。議論になれているということと、広い視野を持っているということと、原子力は素人でも構わない、とにかく自分の気持ちを話せるということによって一流の人

たちという意味である。

(木元座長)

- ・ 参加者もなぜと思う部分をパネリストに議論していただく、そして質問するという気持ちが聞いている側にあると思う。
- ・ では、小川委員。

(小川委員)

- ・ 第1部に関しては、芦野氏が圧巻というか、素晴らしいパネリストだと思った。初めてお会いして、ご自分の意見がすごくはっきりしていらっしゃることに潔さを感じた。
- ・ 問題としては、若い参加者の方が言っていたが、若い人の参加が非常に少ない、若い人にもいろいろとエネルギーのことを勉強して欲しいということである。世代的に若い人が来やすいというか、来るようなやり方が必要だと思った。それが1つ、今後の課題としてあると思う。
- ・ 市民参加懇談会としての提言の話が吉岡委員からあったが、提言をまとめるというよりも、市民参加の形というのは今の時代にどういう形が一番良いか考えていくのがコアメンバーの第1の仕事だと思う。松田委員が言ったように、経験としてまだまだ開催数が足りないというのもあるので、これが本当に一番良い形が分からない段階において、さらに先の、意見をまとめて提言を、というところまでいかないのではないかと思う。
- ・ 確かに、吉岡委員の言うように、1つのテーマをある深さまでやっていくとすれば提言に近づくかもしれないが、アンケートでも分かるように、多くの人の意見を聞きたい、ある程度の時間で司会の人を切りたいというような意見があり、1つの意見を深めるのは、時間的にも無理ではないかと思う。今はなるべく気軽に参加していただいて多くの意見を聞きましようというやり方になっており、深くするのはさらに先の議論だと思う。例えば、今の方法を第1順目の取っかかりと考えるなら、時間的に年月も許すとしたら第2順目のところで、もっと小人数で深くやるという作業をステップ・バイ・ステップでやっていかないと、なかなか的確な提言を、責任を持ってこの会議で出すことは無理なのではないかと思う。

(木元座長)

- ・ また後ほど議論したい。では、井上委員。

(井上委員)

- ・ コアメンバーとして参加し、ずっと座っていて、最後に発言する順番が回ってきたが、第2部の中でのコアメンバーの位置づけがよく分からなかった。舞台とフロアに分けると、コアメンバーは舞台側にいるわけだが、その位置づけがまたよく分からなくて、少し座り心地が悪いと言うか、私としてはフロアの方へ行って、ちょうど中間ぐらいの位置で聞かせてもらった方がちょっと気が楽だったかなと思った。
- ・ 地元青森ということで、参加された皆様の方がよほどこういう問題の歴史的なことや内容をよく分かっておられて、非常に腰が据わっている。私などは本当に素人なので、もし深く質問されたら、とても答えられないと思い、そこにいる立場として、ちょっと恥ずかしいような申しわけないような気がした。
- ・ 第2部の議論の時間が短かったからか、核燃料サイクルについての議論は深まらない

かった。第1部を引きずってくるから、どうしてもメディアとか信頼とか安全に話が流れていってしまった。現場、地元である青森の中で、聞きたかった方もたくさんいただろうし、もう少し核燃料サイクルについての議論が深まればよかったのではないか。もし、もう一度青森で開催ということがあれば、そういうところに焦点を絞って、今度はきっちりその話ができると思う。

- ・ 少なかったけれども、若い方がいたということは本当にほっとしたし、いいなと思った。特に若い女性の主婦の方の意見が、いろいろなものをあまり引きずらないで、今自分の暮らしの中から思うことを言っていると感じたので、とてもほっとした。
- ・ 最後に、会の運営、パネルディスカッション、フロアとの意見交換等をこの会がやることの1つの意味は、「素人っぽさ」ではないかと思う。これがこの会の大きな特色で、素人っぽくぎくしゃくしながら議論を進めていくことが、フラットなところで話をすることの1つの形なのだと思う。そんなにうまくスムーズにプロっぽくやらない方がいいのではないかと思う。試行錯誤ではあるが、まだ3回目、4回目ということで、本当に一つ一つステップアップであると、参加して思った。

(木元座長)

- ・ 大きいシンポジウムのようなものは、固定観念のもとでプロが仕切ってやると型どおりになってしまって、例えば、ごあいさつがあって基調講演があってというようなフォーマットで終始するが、市民参加懇談会は本当に皆様のご意見を中心にして展開しているし、そういう意味では素人というか手づくりというか、ぎくしゃくしながらも見つけていくという作業、それが私は一番良いと思っている。

(中村委員)

- ・ 特に第2部は、難しいところだが、吉岡委員がイメージしていることも非常によく分かるし、実際に吉岡委員には今回それにトライしていただき、そういう手法もあるとは確かに思っている。
- ・ 吉岡委員は提言をするというポジションに大分こだわっているようだが、私は提言に関しては、いわゆる「紙」は重要だとは思ってなくて、それに値するような素材を現場で私達が集められるかどうかということが重要だと思う。多分、吉岡委員も同じことを考えていて、吉岡委員の方がもう少し具体論になっていて、私は素材がそれなりに見つければ良いと思っている。ただその素材を集めるためにどうしたら良いかという問題はあって、吉岡委員がジレンマを感じておられることに非常に共感を感じる。しかし、特に第2部というのは、いかにも手づくりというやりの方が良いと感じていて、今回のことの批判ということではなく、井上委員と碧海委員が前回東京で司会をしたあの感じというのが、気に入っているというか、好きだった。市民参加懇談会のやり方は、こんなふうに出していくと皆さんに分かってもらえるかなと思った。一方で、東京、大阪の場合と立地地域の場合では違いも出てくるので、立地地域ということになると、どちらかという吉岡委員の味方をしてなくなって、もうちょっと素材を掘り起こしたいという気持ちになる。やり方としてはケース・バイ・ケースだと思うが、私は、第1部はプロフェッショナルにやりたい。第2部は可能な限り手づくりで、皆さんと一緒に、とにかく作り上げていく場です、とアピールできるような感じが良いと思う。それも、少し芽が見つかったような気はしている。

(木元座長)

- ・ そう思う。そして、それは意見として集約されてきれいにまとまるという方向ではないにしても、若い男性もいれば、若い主婦の方もいらっしゃったし、また、ご自由にお持ちいただけるように置いておいたパンフレットに関して「これはどういうことだ」というようなことを言った方もいらっしゃったし、いろいろな言いたいことが率直に出せる土台ができていることを認識していただいたという成果はあったと思う。そういう土台があるということは、原子力にとっては悪くないことだという思いがある。

(2) これまでの活動のとりまとめについて

事務局より、資料市懇第9-2号及び第9-3号について説明。

(木元座長)

- ・ 今後のことで、先ほど吉岡委員からも意見があったが、これまでの活動のとりまとめを原子力委員会に報告するということは、今までのコアメンバー会議でも議論の中に再三出てきたし、私も申し上げた。青森でもそのことは確認しているので、何らかの形で原子力委員会に報告はしなければいけないと思っている。
- ・ 1枚紙の資料9-2を作った。これは、市民参加懇談会を数回開催したので、平成13、14年度の活動をとりまとめたという位置付けで、原子力委員会の定例会議これは原則毎週火曜日ということになっているが 内容は後で調整させていただくとして、その場で報告したいと思う。
- ・ 報告としては、今までは、何月何日に市民懇のコアメンバー会議を開催した、とか、青森で開催した時はこうだったと、その都度私から座長報告している。しかし、市民参加懇談会として原子力委員会への報告というのはいっていない。やっていないのはやはり良くないと私は思うし、ここでけじめという意味でも、平成14年度ということでとりまとめをしようということである。どなたか今まで参加してくださった2名ぐらいの方に参加していただき、一緒に報告していただきたいと思っているが、そういう形はいかがか。
- ・ 提言という形には、ならない。提言となると、先ほどいろいろな議論があったけれども、今の段階の懇談会では難しいので、とりまとめで、こういうことをやり、こういうご意見があったという形になると思う。原子力委員会には、長期計画の見直しとかいろいろな作業があるが、そのときにはちゃんと反映してください、という意味を込めてとりまとめをご提示するという形になると思う。そういう形はいかがか。
- ・ 賛同いただいたということで、とりまとめが決まった段階でどなたか、都合がつけば、お二人と限らず全員でも良いが、参加していただきたいと思う。
- ・ 続いて、資料9-3をご覧いただきたい。とりまとめの形をどうするかだが、報告の際には口頭だけではなく、複数枚の紙を提出しなければならないと思っている。
- ・ 「 . これまでの活動」は、過去のコアメンバー会議と市民参加懇談会を列挙している。
- ・ 「 . 活動の整理」は、事務局から今説明したとおりである。1ページの「1 . これまでの活動の視点と今後のあり方」の(1)は、ここに書いてあるとおり、何度

か確認しながらやってきたと思うが、コアメンバー会議をベースとして、原子力政策における市民参加のあり方や、市民の立場から求められる懇談会の場について、企画・検討・実施してきたということになると思う。これまでの活動を通して、原子力政策の策定プロセスの段階から、市民が絡んでいないではないかという声が大変多いと思う。だから、こういう形ででも、少なくとも策定プロセスから市民に参加していただいて、原子力についての考え方、実際にご自分の口、ご自分の言葉でお話しいただきたいという意味での市民参加を拡大していきたいと思っている。それが実は、イエスにしてもノーにしても、市民との間の信頼関係というものが築けるのではないかという理念がここにあると思う。これでよろしいか。

(吉岡委員)

- ・ (2) に書かれていることは、半分以上は適切だと思うが...

(木元座長)

- ・ (2) は、これから読もうとしていたところである。(1) はよろしいか。

(吉岡委員)

- ・ よろしいと思う。

(木元座長)

- ・ では、「(2) これまでの活動から得られた視点」について、お願いします。

(吉岡委員)

- ・ 青森での座長報告について前回検討したときも問題になったことだが、市民について2つのとらえ方をしていかなければいけないと思う。1つは、原子力について、必ずしも明瞭な問題意識を持っていない、知識も必ずしも多くはない「素人」というとらえ方である。そういう市民に対して、大きい会場を用意して自由に意見を言ってもらおうというのが、今まで主として追求してきたやり方である。一方、今日議論したいのは、もう1つのとらえ方をすべき市民であり、少しは知識もあるし問題意識も明確で、提言すら持っているという相当数の人々である。それも事業や政策に関与する利害当事者以外にもそういう市民が非常にたくさんいるという現実がある。だから、そういう人たちとの懇談の場というのも、これから作っていく必要がある。
- ・ その場合、先ほど小川委員だったか、第1段階は広く、第2段階は深くという案もあるということを書いていたが、第1段階、第2段階と分ける必要はなくて、同時並行で、ある程度知識も問題意識も提言もある市民を対象にした試みもやっていく、そういう二正面作戦 というのは何か軍事用語のようで良くないが 両方がやはり必要であり、後者の場合には参加者数は20～30人とか、最大でも50人以下ということになると思う。
- ・ できれば20～30人程度で公募し、テーマを絞って意見、レポートを提出してもらって開催する。そういう場所すら、原子力委員会には何も用意されていないという深刻な事態があるが、そちらの方にも関心を向けていくという記述をこのペーパーに入れることが妥当だと思い、意見を言わせていただいた。

(木元座長)

- ・ 手法については、後で出てくるが、これまでのやり方以外にも、自由にやっていく意識はあり、第1部・第2部構成で大がかりな現在のスタイルにこだわっているわけ

ではないので、言われるような視点を、必要とあらば加えていくことになると思う。ちょっと聞かせていただきたいのは、その場合、知識も明確だし問題意識も持っているという人の参加募集については、公募だけとお考えか。

(吉岡委員)

- ・ 公募だけではなくていいと思う。ただ、利害当事者はあまり呼ばない方が良く思う。

(木元座長)

- ・ 利害当事者には、どこまで含めるのか。ただ電気を享受しているという利益を得ているのも、利害関係になるかなと思う。

(吉岡委員)

- ・ いや、そうではなくて推進当事者である。行政と電力とメーカーぐらいは、できれば外してほしいと思う。

(中村委員)

- ・ この間の青森で発言した方のような、労働組合の方はどうするのか。

(吉岡委員)

- ・ 公募とは別枠で、何人かをこちらで指名するという方法はあると思う。

(中村委員)

- ・ 発言を依頼するということか。

(吉岡委員)

- ・ はい。推進当事者が大勢を占めたら、やはり会の性質が変になると思う。

(中村委員)

- ・ もちろんである。いずれにしろ、何かが偏った中心になるのは良くない。

(小川委員)

- ・ いろいろな仕事を持っていても、個人として生きているのだから、きちんと意見が言える人は、利害当事者という枠は考えなくてもいいのではないかなと思う。社長等だったら若干考えてしまうが、私のような一般の従業員は、それなりの個人の意見を持っており、たまたま勤務先が利害当事者ということだと思う。利害当事者だから意見が言えないというのは、門戸を狭くしてしまうのではないかなと思う。

(中村委員)

- ・ それは、実際の具体論の中で議論しなければいけないことだが、今の吉岡委員の提言というのは、このとりまとめの中で言うと、「(3) 今後のあり方」をもう少し具体的に書き込めばいいのではないかなと思う。

(小川委員)

- ・ 私もそう思う。

(中村委員)

- ・ 誰をどうするかという詳細については、今の時点ではあまり問題ではないと思う。

(木元座長)

- ・ そのとおりだと思う。「(2) これまでの活動から得られた視点」の「懇談のあり方」の真ん中辺りのパラグラフに、「エネルギーを使う生活者としての立場等、問題意識を共有するという視点が重要であり」と書いてあるが、今の議論は、「エネルギーを使う生活者」と一くりにした場合と考え、そこをもっと幅広くやるか、

もう少し狭めて枠をつけていくかという議論と考えられると思う。

(吉岡委員)

- ・ 「生活者」という言い方だと、私が2種類に分類した市民のうちの前者の方のニュアンスが非常に強くなって、こういう書き方だとそちらに重きが置かれ過ぎる、と気になったので意見を言った。

(碧海委員)

- ・ テーマにもよると思う。例えば刈羽でやったときの「今後の日本で私たちはどういう暮らしを望むのか」というようなことに関しては、素人も玄人もないと思う。「(3)今後のあり方」に「多様な「市民との懇談の場」」とあるが、「多様な」というのは別に場所が多様だという意味ではないと思う。内容的に「多様な」ということだと思うので、どういう人を呼ぶかとか、人数をどうするかというのは、やはりテーマによるのではないか。従って、あまりそこを絞らず、「多様な」市民との懇談の場というのをどう工夫していくかというところに、その辺りを入れたら良いと私も思う。

(木元座長)

- ・ 吉岡委員が言われたことも含まれるし、その他にも含まれるかもしれないということである。
- ・ また戻って恐縮だが、「(1)市民参加懇談会の活動」の1つ目のパラグラフに書いてある「市民の立場から求められる懇談会の場について、企画・検討・実施している」と、この「企画・検討」の段階でその都度話し合う。そういう形によろしいか。

(中村委員)

- ・ そう思う。

(小川委員)

- ・ 1ページ目の下から3行目に「皆さんはどう思っているのですか」とあるが、すごく細かいことだが、この問いが少しきついという気がする。「皆さんのご意見はいかがでしょうか」ぐらいにしてはどうか。「皆さんはどう思っているのですか」というと、聞き方として迫っているように感じられる。

(木元座長)

- ・ 文字になるときついのもかもしれないので、検討したいと思う。
- ・ (2)の2つ目、「懇談の視点」だが、一番下のパラグラフに「立地地域の方々、消費地の方々にとって」と、両方入れた。というのは、原子力の共生ということ、立地地域ばかりにウエートが置かれてしまうが、広い意味では、日本が原子力と共生しているわけである。その「原子力との共生」というのはどういうことなのかということ、立地、消費地とこだわらないで一緒に話していこうという視点もこの中に入れた。そういう形によろしいか。よく「産・消交流」という言い方をしてもこれ分けた印象を与えるがそれは必要かもしれないと思う一方、あまりにも対立軸を設けるといふか、対立関係に持っていくことは、少なくともしたくないという気がする。
- ・ その次の「政策への反映プロセス」について、意見はいろいろあると思うが、「広聴」の実施から得られた意見等を、原子力政策策定のプロセスに反映するこ

とが大切である」、の「反映」の仕方が問題になると思う。実際に反映させるためのワンステップ前の形として市民との懇談の場を開催して、そこで得られたご意見などを、先ほど申し上げたように、コアメンバー会議のメンバーの方と一緒に報告させていただきたいと思っている。「座長より」とあるが、開催結果の概要などは原子力委員会の定例会議で座長報告しているが、このとりまとめについてはコアメンバーの方と一緒に報告をする、と考えている。このあたりはいかがか。

(小川委員)

- ・ 第1パラグラフの「ご意見等を、原子力政策策定のプロセスに反映することが大切」という意味が、少し誤解されやすいというか、はっきりしていないという気がする。つまり、意見をその過程に取り込むのか、あるいはこうした意見が出たという、「広聴した」という事実をプロセスに反映するのか。

(木元座長)

- ・ 「反映させる」ということの意味については、いろいろな解釈が成立するだろうと思う。例えば、ある意見があって、それを政策の文言の中に入れて欲しいという方もいるだろうし、パブリックコメントのように、募集したコメントを集約して、まとめて、ある形で原子力政策の中に反映させる場合もある。反映というのはそのとおり入れるということではないとも言える。場合によっては、必要な手直しをしようということになるかもしれない。いろいろな反映の仕方があるので、こういう漠たる言い方が良いと思う。

(小川委員)

- ・ 意味合いを広くすることに意味があると考えてよろしいか。

(木元座長)

- ・ 市民参加懇談会を開催したという事実だけの反映ではなく、開催結果の中身に、今まで気がつかなかった意見が出てくるかもしれない。例えば、原子力長期計画を次回策定するときに、「こういう視点からも考えて下さい」ということも反映の一つだと思う。いろいろな意見があると思う。

(小川委員)

- ・ 意見自体の反映もあるし、やり方の反映もあるということか。

(木元座長)

- ・ 極端な例を挙げると、「核燃料サイクルをやめて欲しい」という意見を聞けば、ここでこういう形でこういう意見が出た、という報告はする。しかし、その他にもある多くの意見の中で策定していくわけだから、「そのご意見はこういう形で私たちは受け取りました。その上で、いろいろな要素を加味してこういう形に策定しました」という答になるかもしれないし、あるいは「そのとおりです」という答になるかもしれない。

(小川委員)

- ・ そうすると、それが大きな意味では提言になるということか。

(木元座長)

- ・ 提言というよりも、意見のとりまとめをお届けするということである。提言という形をとりたければ提言としても良いのかもしれないが。

(森島座長代理)

- ・ 私は法律家なので、少しコンサーバティブかもしれない意見で、発想は木元座長と変わらないと思うが、法律家の性で言葉の面で一言申し上げたい。
- ・ 原子力政策を策定するのは市民そのもの、というのは、市民たちは非常に多様であるため、できないと思う。先ほど提言と言われたが、提言がある方向で集約されるならいいけれども、いろいろな矛盾する提言も出てくる。
- ・ 原子力政策策定は、我が原子力委員会が原子力長期計画を策定する等、そういうところでやるが、今まで私が長計を作る上で感じたのは、非常にたくさんの方が参加をされていて、いろいろな部会を開いて、いろいろな意見がプロセスの中に入って来るわけだが、吉岡委員が言われるように 吉岡委員もその中に入っておられたが いわゆる市民に向けてどうお考えかというのはなかったわけである。だから、原子力政策策定そのものに対して影響する、あるいは原子力政策に意見を反映するという事ではないと思う。もちろん、原子力政策を策定するプロセスの中で、こういう市民懇で出されたような意見がたくさんあり、その中に、今まで専門家が考えていないような、なるほどというものがあればそれが入ってくるだろうから、場合によっては、最終的には提言できるかもしれない。かといって、ではこっちはどうしてくれるのかということもあるだろうから、その意味では議論したことは反映されるかもしれないが、提言されるかどうか分からない。また、提言したからといって、それはできないというものもあるだろうから、標題の「政策への反映プロセス」というのは少しあいまいで、むしろ第1パラグラフの「原子力政策策定のプロセスに反映する」という方が実態をよりきちっととらえているのではないかと思う。つまり、最初からあまりダイレクトに反映しないかもしれないものに対して、意見を反映する、というようなことを言うべきではなくて、皆さんの意見は十分に、政策策定をするプロセスの中で反映させていくということである。

(木元座長)

- ・ タイトルを修正した方が良いということか。

(森島座長代理)

- ・ 「政策策定プロセスへの反映」と、修正した方が良い。
- ・ 先ほどの吉岡委員の話だと、具体的に市民懇で提言したら、それを踏まえてきちんと提言したのにやらないではないかということになるようだったが、これは、政策策定の段階で、いろいろなものを全部含めて議論して、先ほど木元座長が言われたように、これはこういうことで出ました、こういうことで出ませんという、その決定をするのは、広く皆さんの意見を聞きながら責任をもって、原子力委員が原子力委員会でやるということだと思う。

(木元座長)

- ・ 高レベル放射性廃棄物処分懇談会の場合も、パブリックコメントの募集等した上で、ご意見はこういうのがありました、この意見はこういう部分でここに反映している、というように全部対比して提出した。実際に提言する場合には、そういったことはやらなければいけないだろうが、そういう作業の手前の段階として、資料9-3のような言い方にしてご意見を出していただく、ということではよろしいか。

(中村委員)

- ・ 先ほどのタイトルさえ書き直せば良いと思う。

(吉岡委員)

- ・ 私は、森嶋座長代理の意見には賛成だが、この書き方でも、そのことは自明の前提として我々は共有しているものと思ったので、この言葉で誤解を招くことはないと思っていたが、直されても別に構わない。

(木元座長)

- ・ タイトルは「政策策定プロセスへの反映」と修正し、文章は今までも資料として何度か市民参加懇談会の場に出すためにご意見いただいている文言でもあるので、そのまま書いている。それでは、先ほど申したように、委員会に報告するという形にさせていただきたいと思う。よろしく願いしたい。
- ・ 資料9 - 3の2ページ「(3)今後のあり方」だが、2つ箇条書きにしており、1つめは「原子力政策における市民参加のプロセスの更なる検討」、つまり今のようなご意見があって、「更なる検討」というのは、例えば今こうやって市民懇を開いてご意見をいただいて、それをまとめてみようという意見が出ているが、それ以外の形があるのかどうなのかについて、「さらなる検討」をするということである。市民参加懇談会を、青森でやったり東京でやったりという形以外に、吉岡委員が先ほど言われた小規模の会の検討は、この中に「今後のあり方」として、手法として入る可能性があるということになると思う。

(吉岡委員)

- ・ その他には、アンケートもあるのではないか。割合大規模に、国民の意見の分布をみる。あるいはその多様性については、注文という形でアンケートを取ることができればおもしろいアイデアが発見されると思う。

(木元座長)

- ・ 例えば、アンケートというのは、どのようなテーマで、どういう人を対象に、どういう形でやることをお考えか。

(吉岡委員)

- ・ 対象については具体的地域を絞るということは、私はあまり考えていない。できれば外国人を含めてもいいぐらいに考えて、不特定多数に対して、一般的な問題についての独創的な意見を募集するというのを考えている。

(木元座長)

- ・ アンケートというと、設問があって、それに答えていただくというイメージだが、そうではないということか。

(吉岡委員)

- ・ 選択肢方式ではなく、もう少し記述が中心のものを想定している。

(木元座長)

- ・ テーマについてはいかがか。例えばどういうテーマがあるか。

(吉岡委員)

- ・ 六ヶ所村再処理工場の運転の是非、あるいは運転に至るまでの手続というようなものはどうか。例えば、何か月後、どういう条件においては凍結をすとか、そういういろいろなケースを考えて、どのように今後六ヶ所村再処理工場の運転あるいはその取り扱いについて決めるかということについて、アイデアを募る。

(木元座長)

- ・ それは、今思いつかれて、例としてお出しになったと思うが、社会問題として新聞紙上に出てくるような、やや専門的で、一般の人はあまり良く分からないような問題だと思う。

(吉岡委員)

- ・ そう思う。

(木元座長)

- ・ それに対してアンケートをとるということか。

(吉岡委員)

- ・ まさにそういうところで、ある程度知識もあって問題意識もある人の意見の中に、独創的な意見があれば、いろいろと収集・紹介するだけでも価値があると思う。

(森鷗座長代理)

- ・ 専門家については、原子力委員会の別のところでいろいろな専門部会がある。従って、吉岡委員が言われていることを敷衍(ふえん)して考えると、専門部会の中に部会のメンバーでない人の意見をどう反映させるかという問題ではないか。その際に、この市民懇の場を通じて反映させるようなことを考えるかということ、市民懇が原子力委員会の全部の機能を担っているわけではなくて、市民懇はむしろ市民の特に一般市民の方はどう原子力をとらえておられるのか、どういうことを問題にしたり望んでおられるかということ、原子力委員会の方に反映していくものであると思う。専門的なことについては、専門家が入った専門部会が幾つもある。
- ・ それぞれの専門部会は内部の人たちだけでといっても、結構たくさんの方が入っている。それでも内部の人間だけでは国民の信頼は得られないから、もっと外部の意見も取り入れるということが、吉岡委員の意見だとすれば、そういう場として市民懇を位置付けるということではないか。

(吉岡委員)

- ・ とても重要な点であって、私個人としては森鷗座長代理が言われるように、あらゆる専門部会の場が、最後のパブリックコメントで聞くだけではなくて、リアルタイムにアウトサイダーの意見を聞き届けられるような仕組みをつくった方がいい、できれば市民参加懇談会がここにあるというのも考えてみれば少し変な話で、全部が市民参加懇談会の機能を持てばいいわけである。それが機能していないと私は考えており、しょうがないからここでやりましょうというのは、ほかにないからこしかなないという考え方で述べている。各専門部会で、それができればよろしいと思う。

(森鷗座長代理)

- ・ 資料9-3には「今後のあり方」などいろいろ書いてある。市民懇は、市民懇でやらなければならないことは何かということ、4回にわたって試行錯誤しているが、それと同時に、吉岡委員が言われた専門家の意見、専門部会に入っていない方のいろいろな意見をどう吸い上げるか、それは市民懇でやることなのかもしれないし、やらないことなのかもしれない。むしろ専門部会の方が、その意味では的確ではないかとも思える。ただ、そういう場がないことは確かだから、今度原子力委員会に報告していただくとすれば、その中に、市民懇でやるとしても、一年中やっているわけではないし、市民懇でやることに加えて、専門部会の外にいる専門家の意見を反映することを市民懇で同時並行でやるというのはなかなか難しいかもしれないの

で、専門部会が最後のパブリックコメントだけではなく、いろいろな外側の意見を聞けるような仕組みを作ることが、市民懇を作ろうとした趣旨に合うのではないかという趣旨を報告していただいて、その後、原子力委員会で市民懇とは別に作るのか、それとももう1回市民懇に全部投げて、いろいろなことを市民懇にお願いするのか、そういう形で問題提起をしていただく方が、良いのではないかと思う。

(木元座長)

- ・ 原子力委員会と市民参加懇談会と各専門部会の関係図を見ていただくと、吉岡委員が言われる意味はすごくよく分かると思う。森鷗座長代理が言われた各専門部会は、原子力委員会に並列で繋がっている。市民参加懇談会は、位置づけとしては各専門部会とは並列ではない。私がこれを提唱して立ち上げたのは、専門委員がいろいろと話をしてまとめるが市民の声はなかなか届かない。原子力行政を遂行していてもなかなかうまくいかない、なぜなのかと考えたときに、素人 一般市民の方の声が届いていないからではないか、と考えたからである。一般市民の中には有識者という方ももちろんいらっしゃるし、問題意識を持った方もいらっしゃるが、一般の多くの人の中には、ある問題への意見を求められたときに「え、どうしてそういう問題を私たちに教えてくれなかったの」とか、「こういう視点で言いたかった」という声がある。それを吸い上げる場所として市民参加、原子力に関する市民との懇談会というのを立ち上げたわけである。考え方としては、各専門部会でやれないものがあるならば、市民参加懇談会で吸い上げようではないかということが根底にあったと思う。方法としては、市民参加懇談会が吸い上げるのか、あるいは各専門部会に関するものはそこにあったものとして、市民参加懇談会とはまた別の形で原子力委員会に報告するのか、いろいろな方法があると思うが、私は森鷗座長代理が言われるのも分かるが、吉岡委員の考えと少しずれがあると思う。

(吉岡委員)

- ・ あると思う。

(中村委員)

- ・ 両方あって良いだろう。市民参加懇談会としては、原子力委員会に、専門部会についてもこうあるべきだと話をすることで一つの役目は果たすことができるわけである。もう一つは、そういうことができないなら市民懇でそういう場を作ってやってみるという方法がある。吉岡委員はどちらかということ2つ目の方法を具体的にやりたいのだと思う。それが適当な場合もあるし、それはできないけれども市民参加懇談会ではできないけれども、そうあるべきであると原子力委員会に専門部会のあり方を提言または提案するというか、そういう声が市民の声であると伝えるという役目も果たせると思う。

(木元座長)

- ・ 私は、各専門部会等を見ていると、あまりにも専門的過ぎると思っている。専門的に、原子力長期計画に則ってやっている部分がある。そうすると、いやそうではない、こういう声を反映させないと、うまくいかないのではないかという思いがある。それがこの市民参加懇談会の役割だと私は思っている。

(森鷗座長代理)

- ・ 私は木元座長の意見に反対しているわけではない。ただ、先ほどの話で、専門に関

わることを少人数の専門の方たちが特別な議論をするということも市民懇の中に入れて私は構わないと思うが、市民懇は1年間で4回しかできない。それぞれの専門に関わることについてまで市民懇でやれるのかと疑問に思った。

(木元座長)

- ・ いや、今の議論は吉岡委員のアンケートの件から出てきたものである。従って、市民懇でこれをやるということではなく、アンケートとは例えばどういうものかと言うのが発端だった。

(森島座長代理)

- ・ アンケートの件の前に、市民懇のあり方として人数を絞ってやったらどうかという件があったと思う。市民懇としては、今までのようなやり方もあるし、かなり特殊な問題について、人数を絞ってという方法もあると思うが、もともと市民懇というのは、市民の意見を一手に引き受けようということではないと思う。今まで市民との関わりがなかったので、それを持ち込もうというものだと思う。そう考えると、何でも専門部会あるいは原子力委員会の外にある人は全部ここを通じてというのはなかなか無理だと思う。

(木元座長)

- ・ 全部市民懇を通じてとは言っていない。ファジーな面があるのが国民であり、一般市民であるならば、その声を市民参加懇談会で吸い上げていく必要があるし、そのためにこの会の開催もあるわけで、一般の方がそこに関心を持ってくださるなら、何か声が届くかなと期待できる。

(森島座長代理)

- ・ 全部市民懇を通じてとは言っておられないが、こちらはこちらで別だというよりも、各専門部会においても外部の専門家の意見を反映させるような対応を、専門部会として、あるいは原子力委員会として考えてもらったらどうかと思う。

(木元座長)

- ・ それは専門部会がやることで、専門部会が原子力委員会に報告を出している。けれども、国民の理解が得にくく、意見をうまく吸い上げられないのであれば、市民懇で吸い上げる以外にないかもしれない。その場合は、アンケートとか小規模開催というように、フレキシブルに考えて、一番良いことをやれば良い。本当に原子力行政というのはどうあったらいいかという考えの場であるならば、いろいろなやり方があるだろうと思う。

(碧海委員)

- ・ 私は、この資料の9-3、の「1. これまでの活動の視点と今後のあり方」の(1)、これは納得している。(3)についても、とにかく今までやってきたことにさらに検討を加える、あるいは進めようということだから、それでいいと思う。というのは、今まで4回やった市民参加懇談会を見ていて、私たち日本人の市民参加というのものには、いろいろな問題があるということも感じる。本当の意味で市民参加というのものを進めるためにはどこに問題があるのかということをもっと探りたいと思う。だから、提言とか問題を絞るとかということよりも、市民参加ということ自体をもっと考えていくべきだと私は感じている。

(木元座長)

- ・ 手法としてのイメージはすごく私も同感だし、当面これしかないと思っている。そうすると意見を把握するための方法は、今の形を継続していくということか。

(碧海委員)

- ・ もしかしたらやり方を変えなければいけないかもしれない。今までパネルディスカッションの第1部と第2部という構成の中で、例えばパネリストに招いた方の発言によって実にはいいなと思うこともある。参加者がそれで非常に満足する、あるいはそれに対して答える。そういう経験もあるし、いろいろなことを今までの4回の中で経験しているわけだから、そういうものを見ながら、もしかしたら私たち日本人の市民参加というものが、もうちょっとこういうふうになったらいいなということはあると思う。問題を絞ってしまって、それを原子力委員会か何かに提言するというより、市民参加のあり方そのものをもっと検討したいと思う。

(木元座長)

- ・ だから、今回も提言は出さない。だけれども、これまでのまとめは出そうという形にさせていただきたいというのは、今言われたことがとても重要であるという理由もある。
- ・ 少し言わせていただくと、シンポジウムが終わった後に皆さん経験があると思うが、市民の方が声をかけてこられて、ああだこうだと随分議論したりする。井上委員も随分フォローしたときがあった。そうやって、いろいろ個人的に吸い上げた意見をまたここに持ち込むということもあるだろうと思う。
- ・ このように探り探り、いろいろな形を試みながらやっていき、いろいろなご報告をさせていただこうということでもよろしいか。実践していく、そしてさらなる課題があったら検討していく、そのやり方にしても検討していこうということである。

(中村委員)

- ・ 趣旨は良いが、「(3) 今後のあり方」の書き方で一つ言わせていただきたい。箇条書きの1つ目に、「プロセス」「政策」「市民参加」という用語が出てくるが、これ以前にも何回も出てくるので、ダブルミーニングになるとまずいと思う。この書き方だと、「市民参加のプロセス」を検討することになってしまう。そうではなく、「原子力政策策定のプロセスへの市民参加」がどうあるべきかを考えるはずなので、書き方がちょっとおかしいと思う。

(木元座長)

- ・ これですんなり私が受けとめたのは、上のプロセスとは全然違う意味で、単なる市民参加をどういう形にしていっていいのかということのさらなる検討という意味だと考えたからである。手紙を出して、あるいは自分たちが自主的にこういうのをやりたいからとお願いするとか、確かにご要望は来ているから、そういうことも含むと解釈した。

(中村委員)

- ・ 先ほどと同じ意味合いとするなら、文章の整合性があるべきだと思う。木元座長の言われる意味ならば、たまたま「プロセス」という同じ言葉を使ったというだけなので、例えば「原子力政策における市民参加のあり方のさらなる検討」といった言い換えが可能である。

(木元座長)

- ・ 「プロセス」を「あり方」に言い換える。
- ・ 2ページ「2. これまで行われた懇談のテーマと今後考えられるテーマ」だが、「(1) これまで行われた懇談のテーマ」は、これまでの4回分を箇条書きにした。
- ・ 3ページ「(2) 今後取り上げられることが必要な事項・テーマ」は、今ここで議論してもまとまらないかもしれないと思う。

(中村委員)

- ・ あらゆることが我々の取り上げるべきテーマになり得る。今までの経験からいっても、タイムリーなものとか、社会的なニーズのようなものとか、我々もそのところを聞きたいというものなど、コアメンバーで話し合いながら決めてきた。従って、そういうニュアンスを含んだ書き方が良いのではないか。
- ・ 例えば「中間貯蔵について考える」とか具体例を書くのではなくて、原子力政策の流れの中で、タイムリーな話題とか、我々が市民に一番聞きたいこととか、あるいは一般の方たちが一番関心を持っていることとか、そういうものをタイムリーに取り上げて、いろいろな層からいろいろな場所で意見を聞くのだと、テーマについてはそういう言い方をするのが良いと思う。

(木元座長)

- ・ そうすると「(2) 今後取り上げることが必要な事項・テーマ」については、「社会的なニーズとか、そのときのいろいろな事象とか、タイムリーなものを取り上げる」というような形でよろしいか。

(小川委員)

- ・ 「(1) これまで行われた懇談のテーマ」とあるが、思い出してみると、例えば刈羽では「私たちはどういう暮らしを望むのか」というテーマにあった議論は、実際の話し合いの中ではほとんどなかったと思う。

(碧海委員)

- ・ 最後の方に少しだけあった。

(木元座長)

- ・ プルサーマルのことで皆さんの頭がいっぱいだったという現実があった。

(小川委員)

- ・ そんな感じだった。ここにこう書くと、このテーマについて話し合われたんだと思われるかもしれない。例えばこれがホームページに載ったとして、知らない人はそう思うってしまうと思う。そのところが現実にあった話し合いと矛盾しているなという心配がある。

(木元座長)

- ・ 具体的な議論まではここには書かない。
- ・ 今日、「市民参加懇談会 in 青森」には参加されなかった小沢委員と吉川委員も来ていただいている。

(小沢委員)

- ・ このところずっと一座に加わっていないので良く分からないが、うまくいって良かったと思う。

(木元座長)

- ・ 今度は来て欲しい。

(小沢委員)

- ・なるべくコンパクトにまとまってやった方がずっと良いと思う。

(木元座長)

- ・吉川委員も、お願いしたい。

(吉川委員)

- ・欠席続きで申し訳なかった。何も言わないのもどうかと思うので一言申し上げる。
- ・まとめの書き振りだが、市民がどういう人かというのは議論になったと思うが、もし対等にとということであれば「ご意見を伺う」だと少し謙り過ぎているので少し直されたらどうかと思う。例えば、「伺う」でなく「聞く」でもいいのではないかと思う。

(木元座長)

- ・「伺う」を「聞く」にする。

(吉川委員)

- ・「ご意見」という必要もないと思う。どういう市民を想定されたのか、議論が出ていたと思うが、そこは特に謙る必要はないのではないかと思う。

(木元座長)

- ・どう書くのがよろしいと思うか。

(吉川委員)

- ・アイデアは特にはないが、後の方では「意見を聞く」「意見を交換し合う」となっているので、特に「ご意見」とか、「伺う」にしなくても良いと思う。

(小沢委員)

- ・先ほど碧海委員が言われたことと同じように、我々は市民なのか、市民ではないのかとか、いろいろだが、この会でずっと引きずっている問題である。

(木元座長)

- ・ときには市民になったり、そうではなかったり。

(小沢委員)

- ・違う人　ご意見を伺う立場に突如立ってしまったりする。

(碧海委員)

- ・我々はご意見を伺う立場ではないと思う。

(小沢委員)

- ・違う人の立場になったりするがおもしろいところなのだろう。おもしろいところだというふうに思うことにした。

(木元座長)

- ・とにかく、いろいろな経験をした上で「広聴」という言葉が出てきて「広く聴く」というのが出てきて、今まであまりにも聞かなさ過ぎたという立場があったので、こういう言い方をせざるを得なかったというところがあると思う。

(碧海委員)

- ・今言われているのは、「ご意見をうかがう」という表現だけの問題か。

(小川委員)

- ・会話形式にしなければよろしいのではないか。1ページの下から3行目「また、「皆さんはどう思っているのですか」という箇所に対して、私がちょっと強い

で修正した方がよろしいのではないかということに対して、吉川委員がそれほど謙る必要はないのではないかという意見の流れだと思うので、ここは会話形式にしないで、「また、原子力のさまざまな問題についてご意見を伺う」というふうに、さらっと書けば良いと思う。

(中村委員)

- ・ いや、「ご意見を伺う」自体がおかしいという話。いや、おかしいと思う。私たちの立場としては「ご意見を伺う」わけではない。

(小沢委員)

- ・ 話し合うだけで良いのではないか。

(中村委員)

- ・ 意見交換ということと聞くということ、セットで聞くということになると思う。

(木元座長)

- ・ 私の考えではまず相手を聞こう、と、その上で意見交換だから、1段階、2段階、3段階かもしれない。

(碧海委員)

- ・ この報告書を出すのはどこか。

(木元座長)

- ・ 原子力委員会である。原子力委員会に、市民参加懇談会が報告する、としたい。

(碧海委員)

- ・ コアメンバーが出すわけではないのか。

(木元座長)

- ・ コアメンバーが出す。

(小川委員)

- ・ コアメンバーが出す。これをもって、何人かの代表が報告するのだから。

(碧海委員)

- ・ いや、それは原子力委員会に対してということ。

(中村委員)

- ・ そうである。

(碧海委員)

- ・ そうではなくて、この最終的な報告は、原子力委員会の名前で一般にも出るだろうかということ。

(小川委員)

- ・ 議事録で出るのではないか。

(木元座長)

- ・ 議事録でも出るが、一般には、ホームページには原子力委員会に報告したということとで内容は出る。

(碧海委員)

- ・ 内容は載るか。

(木元座長)

- ・ ホームページに載る。

(碧海委員)

- ・ ということは、一般にも出るわけである。そうすると、最終的には原子力委員会が出すということか。

(木元座長)

- ・ 原子力委員会の中の我々が出すということである。

(碧海委員)

- ・ 我々ということはコアメンバーか。

(木元座長)

- ・ そうである。

(碧海委員)

- ・ コアメンバー会議か。だとすれば、確かに「ご意見を聞く」というのはおかしい。

(小沢委員)

- ・ コアメンバー会議が木元座長と森嶋座長代理に提出するのではないか。

(木元座長)

- ・ 違う。

(碧海委員)

- ・ コアメンバー会議が出すということだったら、私はなおさら「ご意見を聞く」は確かにおかしいと思う。

(中村委員)

- ・ 「意見を聞く」で良いと思う。

(碧海委員)

- ・ 「話し合う」とか「意見を聞く」で良い。「ご意見を伺う」のではなくて。

(小沢委員)

- ・ 木元座長と森嶋座長代理はこの専門委員ではないのではないか。

(小川委員)

- ・ みんな専門委員。

(小沢委員)

- ・ 私たちは専門委員だが。

(木元座長)

- ・ 我々2人の原子力委員も市民参加懇談会の構成員だけれども、専門委員ではない。他のコアメンバーは、専門委員である。

(中村委員)

- ・ 意見というと、何となく習慣で「ご意見を伺う」と、すぐ霞が関用語になってしまう。だから、「考えを聞く」とか、「お互いの考えを交換する」といった言い方にしたらどうか。

(木元座長)

- ・ 今の原子力長期計画の前の原子力長期計画を作るときに、これは初めてそういう試みをやって私たちが提言したが、5人で構成された、意見を聞く会だった。地方から来ていただいて、何回かやった。意見を聞くという言葉はそれで良いと思う。

(碧海委員)

- ・ それで良いと思う。

(木元座長)

- ・ 3ページ「3. 「市民との懇談の場」のあり方について」。これは今までいろいろ出たので、この中であえて繰り返さなくてもいいと思うが、具体的には同じフロアとか同じテーブルとか、第1部・第2部にするとか、複数のマイクを設置するとか、いろいろなことを書いているが、これは企画した段階でその都度検討していく。今まではこう実施したということの報告としては良いと思う。
- ・ 4ページ「懇談の場のメニューの多様化」。これも、先ほどからアンケートのご意見も出たし、開催地域からの提言、提案をもとにしてまた開催するという方法もあるだろうし、いろいろなことを考えていきたいと思う。

(井上委員)

- ・ 4月14日に福井市で「信頼回復委員会 in 福井」というのがあった。大阪からと福井からと、それから全国の各電力事業地域から女性が20人ずつぐらいで全部で80名ぐらいと、13電力会社の社長 お一人だけ副社長で、あとすべて社長のご参加の会議があった。何があったかという、立地地域の女性たちと、大消費地大阪の意見をダイレクトに聞きたいという会議だった。2時間ぐらいフリートーク、テーブルトークというのがあったが、すごくそこで感じたのは、いわゆる日本のエネルギー問題として原子力をどうするかと、共有するという言葉がキーワードであるのだが、これだけ13社で温度差があるのかというのをまずすごく感じた。ある電力会社は原子力が20%ぐらいのシェアだから、普段から原子力に対する理解促進などはあまり問題ではないとか、自分の会社は地域とはとてもうまくいっており、今回は東京電力の問題が発端であるとか、言ったら自分たちの方に波がかぶってくるの方が心配だとか、半分以上の電力が止まっても、今のところ東京、関東は何ら生活に支障がないということが、自分の地域の原子力発電のシェアに対する否定につながると、つまりいらぬのではないかという疑念が生まれることの方が心配だとか。こういったお話から、電力会社によってこれだけ温度差があるのかということを感じた。
- ・ そうすると、ここに書いてある原子力政策は、日本国という一つの一枚岩ではないわけである。そうすると、信頼回復は東京発でいくことになる。福井、柏崎、青森という、立地地域に行っているいろいろ話をしているが、これからもっと他電力地域とか、いわゆる一般市民とか国民と言ったときにはその他の地域も多分にあるわけだから、そういうところに行ったときの関心のなさとか、自分たちは何も問題はないとか、電力会社は何も問題はないとか、電力会社同士で物すごい温度差があること自体を見聞きしたら、すごくびっくりする。

(小沢委員)

- ・ まず社長たちの話をしてもらって.....

(井上委員)

- ・ 青森での開催で、会場の市民の方が青森の先生がいないのと言われたように、やはり地元の電力のトップもしくは事業責任の方のお話を聞くのは、参加する市民にとって一番聞きたいことでもある。大阪で東電の話を聞いても、靴の裏から搔いているような感覚だし、同じ福井県と言っても関西電力と北陸電力が両方入ってきたら、北陸電力は志賀がもう1基できて、それで40%になるが、今までは20%で何ら問題はない、それでもいろいろやっているとか、沖縄電力になると、もうほとん

ど関係ないような、これからもし原子力発電所を作るとしたら、参考にさせていただきます、という程度のものであった。和気あいあいとちょっとテーブルトークしましょうで終わってしまう。多分に一枚岩とは言えない状況というのも前提に入れて、国民とか市民とか地域差、温度差というのを考えて、企画していかないと、とすごく感じた。市民参加懇談会にはぜひ、電力会社の方の参加が欲しい。地元の学者、先生の参加も欲しいという気が大変した。一番真剣にその方の話は聞きたいようである。

(木元座長)

- ・ 特に地元の方々はそうだろうと思う。

(井上委員)

- ・ それはすごく満足度につながると思う。

(木元座長)

- ・ 一方で吉岡委員のようなご意見 利害関係者抜き もあるし、一方は、ずばりその方たちからというのも、その都度あって良いということだろう。

(井上委員)

- ・ 電気料金払っているのはこの会社だというのが一番身近に感じる。

(木元座長)

- ・ そういうものも加味していきたい。

(中村委員)

- ・ 4 ページ「 懇談の場のメニューの多様化」。箇条書きの最初だが「その都度、開催地域の方々のご意見をうかがうことにより」の「ご意見を」を「ご意見も」にしていただきたい。もちろんご意見も伺うが、あくまでも原則は、我々コアメンバー会議でテーマを話し合っ決めていくということだと思う。

(碧海委員)

- ・ 「意見も聞く」でよろしいのではないかな。

(中村委員)

- ・ 「意見も聞くことにより」が良い。少なくとも「も」にして欲しい。

(木元座長)

- ・ 承った。また後でも、ご覧になって気になることがあればお知らせいただきたいと思う。

(3) 次回の市民参加懇談会の開催について
事務局より、資料市懇第 9-4 号について説明。

(木元座長)

- ・ 資料 9 - 4 の中で、どこに決めようということはない。大体このあたりが考えられるかなというご意見があったらお願いしたい。参加者を公募するので、ぎりぎりになってしまった、青森開催の二の轍は踏みたくないで開催までなるべく 1 カ月間ほしいと考えている。従って、今日ご議論いただいて、一生懸命やっても 6 月下旬ぐらいかなという感じである。
- ・ ここに書いてある最近の主な動き、「もんじゅ」の判決もあったわけだが、福井というご意見もあるかもしれないし、福島県も書いてある。この間小沢委員は福島へ

いらしたと伺った。

(中村委員)

- ・ 原子力安全・保安院の説明会。

(木元座長)

- ・ 原子力安全・保安院開催のシンポジウムみたいなもので、ご意見、それこそ聞くという催しだったと思う。福島へ行かれ、浜通りで2日に渡って開催されたと伺った。感触はどうだったか。

(小沢委員)

- ・ 別に、特別なことはない。

(木元座長)

- ・ やはり地元は、早く起動して欲しいという感じか。

(小沢委員)

- ・ 地元任せとてくれと言っていた。現場では働きたい人だっている。
- ・ そういう意見はあった。けれども、なかなかこういうのは言えない。大きな声で反対する方が強い。「危ないぞ」と言っているときに「そんなこと言ったって、仕事がほしいからすぐやらせてください」と言ったら、後の責任どうとるんだ、もし何かあったらと言われたら、仕事のために賃金もらうために再開せよというようなことはいけないのかなという気持ちはみんなあると思う。それは微妙に会議の中にはあった。けれども、東京電力のやったことが大きいから、何故うそをついたのかとか、ごまかしたのかとか言うと、その説明がとても長くかかって、結局堂々めぐりしてしまう。

(木元座長)

- ・ 原子力安全・保安院だけが行ったのか。

(小沢委員)

- ・ 保安院の人は、すごく詳しい。

(木元座長)

- ・ 東京電力は出なかったのか。

(小沢委員)

- ・ 東京電力は出なかった。だから保安院はどうやって補償するんだと言われてしまう。役人が今大丈夫ですと言ったって、1年か2年すればもういないだろう、中心の人も高齢ではないか、私が責任とりますと言って、責任とってくれと言ったときには、もう私はやめてるんだと言われたらどうするだとか。そういうふうみんな、やっぱりたらい回しではないが、この不信感というのは強いのではないか。行ってみたら課長はどこかに行っていて、大丈夫だと言ったのにもういないとか。だけれども保安院は本当に熱心に説明した。1回目は討論やってだめだった。だから、もう2回目は、何が、どこが傷というのであったのか、そのところだけを集中してやってくれと、報告は5分にしてくれと、それでも20分もしゃべる。役人というのは話が長い。1つでも抜けちゃうといけないと思うらしい。ここで要求されているのはここなんだから、次の人にバトンタッチすれば良いと思うんだけど、この人が完璧にしゃべって、次も完璧にしゃべって分からなくなっちゃうわけ。あれが手なんだと思う。だから、2日目はひびのこと以外言わないでくれとあって、うまく

いったと思う。「ああ、ひびって何だったかよくわかった」という意見があった。

(木元座長)

- ・ それに対して、その後の安全性までの話はいくのか。

(小沢委員)

- ・ それからもう一回ぐらいやった方が本当はよかったのだと思う。あれではアリバイ闘争とも受け取れる。説明会をやりましたという。本当に納得してもらうのであれば「ひびの問題は分かったのですか」ということを、それこそアンケート調査なり実施して、参加した人たちにこういう意見があったということでもう一回やり、もしかしたらこれが最後かもしれませんが、これで分かったというご意見が少なくても再開しますと正直に言ってやった方が良いと思う。
- ・ 「もうぜひ再開したいから、この間のご意見ではこことここまで全部説明した、異論もあまりなかった、あった意見はこれとこれだった、それでこういうふうにしてくれという意見もあった、ついては、もう早くやりたいんです」という下心があるのだから、危険だとか書いてあって、そういうふうになっているなら言ってしまって、やった方が良い。

(木元座長)

- ・ 正直に。

(小沢委員)

- ・ ただ、やっぱり本当にシュラウドの部分の問題などは相当誤解があると思う。取り替えなければならない配管、管の問題だったらここはどう、いつ取りかえるのかとか、日本にどのぐらい在庫があって、いつ発注してというような、そこを細かく、そこばかりやれば良いと思う。あのひびは何だったのかと。それがずっとご意見を聞くことから始まって、ちゃんと丁寧で、万遺漏なきを期しているのは分かるが、本当にやらなければ困るならそこに集中すべきだと思う。でも、保安院というのは私は初めて見たのだが、割とよく……

(木元座長)

- ・ 勉強している。

(小沢委員)

- ・ いや、説明をしようということに熱心ではあった。

(木元座長)

- ・ 原子力安全・保安院長が行ったのだろうか。

(小沢委員)

- ・ 院長。院長は年寄りだからとか言われてしまう。あなたが責任とると言っても、いつまでやる気かとか。

(木元座長)

- ・ そうすると、資料9 - 4に例えばここ発電所の立地地域、福島と書いてあるんだけど、可能性はあるか。

(小沢委員)

- ・ 福島でも開催した方がよろしいのではないか。

(木元座長)

- ・ ではこれは候補として、挙げておく。

(中村委員)

- ・ いや、福島把事情を勘案する必要はあると思う。

(小沢委員)

- ・ 地元の意向もあると思う。

(碧海委員)

- ・ 申し入れているところはないのか。開催して欲しいと。

(木元座長)

- ・ 公式の申し入れはないが、好意的なお話は複数いただいている。
- ・ 中村委員は新潟へいらしたと伺った。

(中村委員)

- ・ 柏崎市と刈羽村へ行った。どちらも原子力安全・保安院の説明会的时候。説明会とは別に地元の方から聞いたお話としては、刈羽の村民も今回の件で本当に首都圏に我々の電気が行っているんだと再認識したようだった。つまり、我々の原子力発電所いかによって、首都圏はどうなるか分からないのだというのが実感として感じられて、それが必ずしも原子力に対してマイナスの方向ではないようだというニュアンスの話だった。保安院の説明については、小沢委員が言うようなことは確かにあった。役人の説明が長いという声や、院長だっていつまで在職しているのかという……

(小沢委員)

- ・ でも、全面否定にはつながらなかった。

(中村委員)

- ・ 安全宣言をするのかということ、あの時点で保安院は、運転再開は事業者が決定するもので、リコメンドするものではないような姿勢だった。柏崎の方は、反対派のグループが天王山だと思った様子で、不規則発言連発という形だった。現場には市長もいて、やりとりは聞いておられた。その後保安院や市長に、メディアのぶら下がり取材もあったようだった。
- ・ いずれにしろ、立地地域をある程度重視しなければいけないことは確かだが、先ほどの井上委員のご意見ではないが、中規模程度の消費地、つまり地方の大消費地で、もうちょっとテーマを広げて、日本のエネルギーのこれからを考える、というようなものが1回あってもいいと思う。

(木元座長)

- ・ 具体的な場所としてはどこか。

(中村委員)

- ・ 福井、新潟、福島、青森はいろいろな開催が多いと思う。集中的に行くと、地元の方から話を聞くと、地元の人もつらいのではないかと思う。

(小沢委員)

- ・ うんざりするかもしれない。

(中村委員)

- ・ 名古屋は大都市だけれども、例えば…

(小沢委員)

- ・ 名古屋は案外そういう開催が少ないかもしれない。

(中村委員)

- ・ 私のイメージとしては、例えば鹿児島とか広島という規模を考えている。仙台もある。

(小沢委員)

- ・ 私たちが市民だとするなら、自分たちの手でピラまいて、マイク持って呼びかけて集会やります、ということになるが、市民参加懇談会は全部もう用意されて、私たちは日程表もらって行けば良い。だから、私たちは市民ではないことをやっている。

(木元座長)

- ・ コアメンバーの皆様は、市民ではあるが専門委員でもある。
- ・ 候補の中に静岡県がある。立地地域として名前を挙げたが、静岡市はいかがか。

(中村委員)

- ・ 清水市と合併して大きくなったところである。
- ・ 私の経験だと、静岡大と静岡産業大の学生たちが割に熱心である。静岡の大学には、環境問題のグループが随分ある。私が会ったときは、結構気持ちの良い青年たちだった。

(小川委員)

- ・ 若い方々にも、来てほしいと思う。

(松田委員)

- ・ 開催日によると思う。私のところの卒論の学生たちは、今年は3名原子力廃棄物関連をやる。意識調査みたいなことをやらしてもらおうと思っている。

(中村委員)

- ・ 松田委員をご存知かもしれないが、学部・学科とは別に、環境問題に関心のあるグループが、大学のサークルに幾つかあって、その辺りが横に連絡とったりして、参加してくれるかもしれない。

(木元座長)

- ・ 今のところ、静岡と広島と名古屋が候補として挙がっている。

(吉岡委員)

- ・ 札幌はどうか。資料9 - 4には、電力量が多い方から4つの電力会社しか入っておらず、残り5つが抜けている。

(木元座長)

- ・ 札幌、泊。

(中村委員)

- ・ 高松などもある。

(吉岡委員)

- ・ 金沢はいかがか。

(碧海委員)

- ・ どこか関西電力の管内で、候補になるようなところはないだろうか。

(中村委員)

- ・ 大都市ばかりである。京都、大阪、神戸。

(井上委員)

- ・ もう少し小さい都市だと、姫路がある。関西電力が火力発電所を持っている。L N

G火力発電所がいくつかある。姫路には、火力もあって揚水発電もある。工場立地が物すごく、もともとあったところであり、人口規模としては45万都市である。

(木元座長)

- ・ そうすると、その開催可能かどうかというのを、こちらで今静岡、広島それから名古屋、高松、姫路、こんなところを含めてちょっと調べてみる。それで皆さんにお諮りする。開催時期は、できれば6月下旬までにというのはよろしいか。

(中村委員)

- ・ よろしいと思う。なるべく早い方が良い。

(小川委員)

- ・ 下旬「以降」と書いてある。

(木元座長)

- ・ 末ごろが一番良いと思う。6月末以前だと、時間的に間に合わないと思う。

(小川委員)

- ・ 6月20日から6月30日までという感じか。

(木元座長)

- ・ あるいは7月の初旬になるかもしれない。検討してみる。

(4) その他

(木元座長)

- ・ 今日はいくら人数がそろっているが、コアメンバーの方はお忙しい方が結構いらっしゃるの、もう少し増やしてはどうかというご意見がある。どなたかこういう人に入ってほしいというご意見はあるか。こちらの方で選考して、専門委員としてお諮りしなければならない事項だと思うので、こちらで検討するということがよろしいか。
- ・ 賛同いただいた。あと3～4人お願いしたいと思っている。できればあちこちに、出張してご参加いただこうと思っている。よろしく願います。
- ・ 次回のコアメンバー会議は5月の下旬ごろという形で調整させていただくことでよろしいか。スケジュール調整の連絡をまた入れる。
- ・ 今日時間を超過してしまい本当に申しわけなかったが、いつもたっぷりご議論いただいていたありがたいと思っている。これに懲りずに、またぜひご参加いただきたい。本当にありがとうございました。

本日の議論を踏まえて、事務局にて資料9-3号を修正し、後日、FAX等で各委員にお諮りした上で、次回のコアメンバー会議にてご確認いただくこととなった。

以上